

# 計数過程の強度過程の間の相関関係について

東京大学大学院数理科学研究科 木村晃敏

$\mathbb{X}_t = (X^1, X^2)$  を フィルター付き確率空間  $\mathcal{B} = (\Omega, \mathcal{F}, \mathbb{F}, P)$  ( $\mathbb{F} = (\mathcal{F}_t)_{t \in [0, T]}$ ) 上の

$$\mathbb{X}_t = \mathbb{X}_0 + \int_0^t \mathbb{X}_s^0 ds + \int_0^t \mathbb{X}_s^1 dw_s \quad (t \in [0, T])$$

(ただし、 $w : r$  次元  $\mathcal{F}$ -Wiener 過程、 $\mathbb{X}_0 : \mathbb{F}_0$ -可測確率変数、 $\mathbb{X}^0 : 2$ -次元  $\mathbb{F}$ -適合過程、 $\mathbb{X}^1 : \text{ある仮定を満たす } \mathbb{R}^2 \otimes \mathbb{R}^r$ -値  $\mathbb{F}$ -適合過程) なる伊藤過程、 $a_n$  を  $a_n \rightarrow \infty$  (as  $n \rightarrow \infty$ ) なる正のパラメータとし、 $\mathbb{Y} = (Y^1, Y^2)$  を強度過程  $a_n \mathbb{X}$  をもつ計数過程とする。時刻  $(t_j)_{j=0, \dots, b_n}$  における  $\mathbb{Y}$  の観測データから、 $\mathbb{X}$  の間の相関を推定する。

まず、(共) 分散推定量  $S_n^{\alpha\beta}$  ( $\alpha, \beta = 1, 2$ ) を

$$S_n^{\alpha\beta} = \sum_{j=2}^{b_n} \left( \frac{\Delta_j \mathbb{Y}^n}{a_n h_j} - \frac{\Delta_{j-1} \mathbb{Y}^n}{a_n h_{j-1}} \right)^{\otimes(\alpha, \beta)}$$

のように定義する。ただし、確率過程  $V$  に対して  $\Delta_j V = V_{t_j} - V_{t_{j-1}}$ 、 $h_j = t_j - t_{j-1}$  であり、 $A^{\otimes(i, j)}$  は  $A^{\otimes}$  の  $(i, j)$  成分、 $A^{\otimes} = A \otimes A = AA^*$ 、 $*$  は転置を表す。ある仮定のもとで、 $S_n = (S_n^{12}, S_n^{11}, S_n^{22})$  の漸近混合正規性

$$\left( \frac{T}{b_n} \right)^{-1/2} (S_n - U) \rightarrow^{d_s} \Gamma^{1/2} \zeta$$

が成り立つ。ただし、 $U = (U^{12}, U^{11}, U^{22})^*$ 、

$$U^{\alpha\beta} = \frac{2}{3} \langle X^\alpha, X^\beta \rangle_1 = \frac{2}{3} \int_0^1 X_t^{\alpha 1} \cdot X_t^{\beta 1} dt \quad (\alpha, \beta = 1, 2),$$

$\zeta$  を  $\mathcal{F}$  と独立な 3 次元標準正規確率変数、

$$\Gamma = (\gamma^{pq})_{p, q=(1,2), (1,1), (2,2)}, \quad \gamma^{pq} = \int_0^1 (\mathbb{X}_s^1)^{\otimes p} \cdot (\mathbb{X}_s^1)^{\otimes q} ds$$

とする。ここで、 $x = (x_i), y = (y_i) \in \mathbb{R}^r$  に対して  $x \tilde{\otimes} y = ((x_i y_j + x_j y_i)/2) \in \mathbb{R}^r \otimes \mathbb{R}^r$ 、 $x = (x_i^\alpha) \in \mathbb{R}^2 \otimes \mathbb{R}^r$  に対して  $x^{\tilde{\otimes}(\alpha, \beta)} = x^\alpha \tilde{\otimes} x^\beta$ 、 $x = (x_i), y = (y_i) \in \mathbb{R}^r$  に対して  $x \cdot y = \sum_{i=1}^r x_i y_i$ 、 $x = (x_{i,j}), y = (y_{i,j}) \in \mathbb{R}^r \otimes \mathbb{R}^r$  に対して  $x \cdot y = \sum_{i,j=1}^r x_{i,j} y_{i,j}$  である。また、相関推定量  $C_n^{12} = S_n^{12} / \sqrt{S_n^{11} S_n^{22}}$  を定義する。デルタ法と  $S_n$  の漸近混合正規性により、相関推定量の漸近混合正規性が示される。ここでさらに、 $\Gamma$  の推定量を提案し、その一致性を確かめる。

以上により、スチューデント化された相関推定量の漸近正規性が示されるので、信頼区間推定を行い、仮説検定に基づいて、相関の検定を行うことができる。実はこの場合、 $a_n$  が非常に大きい、すなわち非常に多くのイベントが発生している必要があるが、この点については、シミュレーションを用いて検討する。